

〈声〉の採集者列伝
聞き手たちの時代

小泉 八雲

永遠の魂の探究者

— 知られざる小泉八雲の世界 —

飯島 吉晴

はじめに

小泉八雲ことラフカディオ・ハーン（一八五〇～一九〇四年）の生涯は、ギリシヤでの誕生からアイルランドでの幼少年期、イギリスやフランスでの神学校での教育期などのヨーロッパ時代（一八五〇～六九年）、ニューヨークに到着し、シンシナティでの八年間の生活のあと、ニューオーリンズに移って一〇年暮らし、西インド諸島のマルティニーク島での約一年半の滞在を含むアメリカ時代（一八六九～九〇年）、横浜に到着したあと、松江、熊本をへて神戸に滞在し帰化して小泉八雲となり、東京に移って五四才で没するまでの日本時代（一八九〇～一九〇四年）の三期に分けられる。小泉八雲は、欧米世界に英文で日本や日本文化を広く紹介した人として知られ、日本では『怪談』の作者として有名であるが、来日以前の活動に関しては専門家や関係者以外には一般にはあまり知られていない。ここでは、ハーンと呼ばれていたアメリカ時代の活動を中心に再検討しながら、日本で主要な作品を多く生み出

した背景をさぐってみたい。このため、本文中の呼称は小泉八雲よりも、ラフカディオ・ハーンを基本にして記述することにした。

一・アメリカ時代の特徴

ハーンが、挿絵画家のウエルダシとともに横浜に到着したのは、一八九〇年四月四日のことであった。到着、早々にハーンは人力車を雇って、横浜周辺の神社仏閣や町並みの探訪を開始し、日本の第一印象を記録するとともに、東京帝国大学博言学教授のチェンバレンに、就職の斡旋と来日の意気込みを記した次のような書簡を出している（チェンバレン宛書簡、一八九〇年四月四日横浜）。すなわち、「なんとかして日本に関する優れた書物を書いてみたいというわたくしの気持ちは、とても言葉ではあらわし尽くせないほどです。（中略）わたくしは、最小限、一つの民族の話し言葉を習得し、その民族の情緒的特質を幾分かでも解せるようになるまでは、その民族について本当のことなど書き得るものではないと考えております。西インド諸島では、そのフランス植

民地の方言および民間伝承を二年にわたって研究することができました。(中略) 日本では、数年間の滞在なしには、わたくしが研究したいとねがっている生活諸相を、正しく扱うなどのことは、とうてい望むべくもないでしょう」(ラフカディオ・ハーン、一九八三年、三六七頁)とある。

しかし実際には、ハーンは、印欧語とは系統の異なる日本語の読み書きの習得は果たせず、英仏語のほか、独特の「へるん言葉」とカタカナで日常の意思疎通をはかっていた。通常の日本学者や文献学者とは異なり、ハーンは目よりも、むしろ耳を通して日本人の心意を掴みとろうとしたのである。ハーンは、一六才のとき、イギリスのダラム市郊外のアシヨーにある聖カスバート神学校の校庭で遊んでいてロープの結び目が左目に当たったことが原因で失明し、左目は白濁した膜で被われて醜く膨らみ、右目の方も極度の近眼でやや飛び出していた。この事件のあと、陽気で活発なハーンの性格は一変し、幼少期の家庭崩壊に加え、大叔母ブレナンの破産などの不幸な出来事も重なって、一七才のときにそれまでの物質的にめぐまれていた裕福な生活から貧窮状態に陥り、将来のあてや宿も無く、いつも空腹をかかえたまま、ロンドンのチームズ河畔を昼夜孤独にさまよう最底辺の生活をするようになった。当時、英国社会はヴィクトリア女王治下で国力は充実し、繁栄の絶頂期にあつて文明や進歩を謳歌していたが、その反面で取り残された貧しい人々が密集する貧民窟では悲惨な人生の暗く醜い部分が露呈し、ハーンはそうした負の部分に否応なく接しざるを得なかった。

どん底の生活を打開すべく、一八六九年にアメリカに渡つてからも、ハーンには読み書き以外には何の技術もなかったため、わずかな旅費はたちまち尽き、ホテルや食堂のボーイ、鏡の行商、チラシ配り、広告取り、校正係、煙突掃除、下宿屋の雑役、倉庫番、クズ集め、夜警、賭博場の番人、電報配達、図書館の臨時雇いなどさまざまな職業を転々とし、厩の干し草や倉庫などで寝泊まりする状況であつた。渡米して数か月後に、ハーンは、シンシナティで印刷屋のワトキンに偶然出会つて、面白がられ、二年間ほど宿と食事の提供をうけるとともに、無給ながら印刷の仕事も教えられ雑用をこなした。ワトキンには身元保証人として、職も世話してもらい、ハーンは終生父親代わりとして文通を続けた。

ハーンは、こうした貧窮の生活の間も、文筆一本の言葉に関係した仕事で身を立てるべく、公立図書館の常連となつて勉強をつづけ、その熱心さには館員も頭を下げるほどであつた。ハーンは、そのみずほらしい服装や容貌、一風変わった態度からよく人々のうわさの種にされていたが、異常に猜疑心が強く、内気でいつもおどおどして、人と意思疎通を図るのがうまくなかった。このため、世間ではどの職業も長続きせずに変え、無能で無器用であつたが、図書館の中では書物を自在に扱え、「文字の世界の自由」を満喫していた。図書館では、一九世紀のフランスの作家ゴーチエ、フロベール、ボードレール、ネルヴァルなどのほか、哲学や自然科学、民俗学や人類学の本を手当り次第に読みあさつていた。大叔母の破産で大学進学はかなわなかつたが、勉強好きだつたハーンは、独

学独力で当時第一線の成果を身につけようとしたのである。

一八七四年に、ハーンは二年前から寄稿していた『シンシナティ・インクワイアラー』紙の新聞記者として雇われ、辣腕の編集長コリカルの叱咤激励のもとで、文学・美術・思想・科学から一般の社会事象まで健筆を揮うようになる。記者仲間には、音楽評論家のグレビルもいて親しくなり、音楽への関心も抱くようになる。ハーンは、多くの犯罪や事件の温床になっている危険な下層社会への社会探訪も積極的になし、ホームレス、畜殺場、貧民窟、霊媒、娼婦、美人モデル、犯罪者、波止場にたむろする多くの黒人や荷揚げ人足など社会の底辺や裏側で生きる人々を取材した、ぞつとするような残酷で気持ちの悪くなるような記事や食事が喉を通らず嘔吐を催す記事、さらにヴォードー教や夢魔、遺体利用法など恐ろしさに身のおのくような記事を次々と書くセンセーショナル・レポーターとして活躍した。とくに、「皮革製作所殺人事件」は、事件の事実経過や状況の克明なレポートにくわえ、焼却炉に生きたまま被害者を押し込んだ手口や想像を交えた沸騰し焼け残った脳髓の感触など、ハーンの記事者としての文名を一気に高め、売上げ部数を伸ばしたとされる。西崎一郎は、アメリカの新聞記者時代のハーンの活動と意義を高く評価している（西崎一郎、一九七五年）。ハーンは、短身矮躯の混血児で風采があがらず絶えず劣等感にさいなまれていたが、液体のようにどこにでも入り込んでいった。しかし、もの静かで出しゃばることなく受け身な態度でいたため、いつも一人ぼっちでいる風変わりなハーンに誰も

が気軽に話しかけてきた。取材活動の上では、それまで短所であったことが、誰にも警戒されず話が聞きだせる長所となったのである。ハーンは、どこでも話を引き出す聞き上手であった。こうして、ハーンは、外見だけでなく、本質的に余所者であったため、あらゆる生活諸相を「子供のようであどけない澄んだ眼で眺めること」（E・ステイブンスン、一九八四年、六九頁）ができたのである。七年間のシンシナティ時代に、ハーンは、金銭や生活のために下層社会をスケッチした新聞記事と、良心的な文学作品の翻訳という二つの種類の別々の仕事をしていと思っていたが、「どちらの作業も、この薄汚れた修羅の巷に自分だけの世界を再現するための孤独な努力の一部」（E・ステイブンスン、一九八四年、一〇〇頁）であり、この二つの表現が融合し調和してハーンの文学が芸術の領域に達するのは、多くの経験を経験をくぐりぬけた後年のことであった。ハーンは、人間と言葉という二つのものに対する異常なほどの執着はこの時代にはまだ二分されたままなのであった。ハーンは、四才のときに最愛の母親と生き別れになり、英国陸軍の軍医であった父親にも見捨てられ、子供のなかったカトリック信者の大叔母ブレナンのもとで養育された。ハーンは、母との別れや家庭崩壊などのために精神的に不安定な状態に置かれていたにもかかわらず、夜は真つ暗な子供部屋に一人閉じ込められて寝せられ、どんなに泣き叫ぼうと出してももらえなかった。ハーンは、不安から夜だけでなく昼間も鬼やお化けを幻視するようになり、こうした夢魔から覗かれぬように、寝る時は掛け布団の

下に頭を隠すようにしたが、もし寝具を引っ張りに来たときには大声をあげて叫んだという。しかも、ハーンはこうした出来事をほかの人に話すのを禁じられていた。五才のとき、従姉のジェーンのつべらぼうの幻をみたのも、この大叔母の屋敷の四階の鏡のある部屋であった。のちに、イギリスのカトリック系のガスバート神学校の図書室で、ハーンはブルワー・リットンの怪奇小説『憑かれた者と憑く者と』を読み、長年苦しめられてきた恐怖体験が自分だけのものではなく普遍的なものだと知って、夢魔や魑魅魍魎の恐怖から解放されて安堵感を覚えた。

ハーンは、生涯にわたって怪談や異国・異文化に関心を寄せ続け、失われたギリシャ人の母を思慕した。また母との絆を求めるかのように海や水泳が好きであった。幼くして母と別離したハーンの文学作品の底流には、母性的なものや失われゆくもの、小さきものへの強い愛着や憧れが絶えず息づいていた。ハーンの心の底には、幼少期以来のこうした「孤独と不安と喪失感」が重くのしかかっており、この心の重圧を解き放ち鎮めるために、数多くの記事や物語を書き続けたのである。ハーンは、創作力にはあまり恵まれません、むしろルポルタージュや翻案、再話など元になる事実や原話があつて、それらを自分の趣味に従って選択し、芸術的な加工を施して作品に仕上げる手法を得意としていた。とくに、ロマン派的な永遠への憧れやありえないものを表現した作品をとりあげ、他人の言葉を用いて自分のことを語る手法である。翻訳を創作への最良最善の道と考えていたハーンは、一字一句疎か

にせず、推敲に推敲を重ねて文章修行としていた。とくに、来日まで心酔していた当時新人のロテイからは感覚や印象を重視した異国趣味のみずみずしい装飾性に溢れた文体や風景描写を、また同年生生まれのモーパッサンからは人生を直視する平明できびきびとした簡潔で素直な文体とその精神姿勢を身につけていった。しかし、ハーンの優れた文筆力はフランス文学の翻訳にとどまらず、やがて異国の伝説や民俗伝承の再話に力を注ぐようになったのである。世界各地の神話・伝説の再話物語二七篇を取めた『異邦文学残葉』（一八八四年）や中国を舞台にした六篇の再話物語集『中国靈異談』（一八八七年）は、その代表的な作品である。

平川祐弘は、「犯罪記事といい、科学記事といい、自己の内なる不安に捌け口を与えるための、ハーンの執拗な描写だったのであるまいか」（平川祐弘、一九九四年、二六四頁）と述べ、「そのような自己の内なる戦慄に芸術的な形を与える上で、怪談というジャンルほど適したものはない。そしていまそのような視角から、ハーンのアメリカ時代の著作活動を再検討してみると、この作家がシンシナティでもニューオーリンズでも仏領西インド諸島でも、民俗の風習からはじめて怪談奇談の類に非常な注意を払い、口承伝説の幾つかを拾い集めていることに気づかされてくる」（平川祐弘、一九九四年、二六四頁）としている。つまり、ハーンの執筆衝動の根源にあるものは、心の深層にある自己の内なる恐怖であつて、単なる怪奇趣味ではないと、平川は指摘している

のである（平川祐弘 一九八〇年、四六四頁）。実際、ハーンは、アメリカの作家で敬愛する友人のオコーナへの書簡（一八八四年六月二九日）の中で、「成功するためには、一つの仕事に集中すべきだと思います。ですから、私は珍しいもの、奇妙なもの、不思議なもの、異国風なもの、怪異なものを崇拜すると心に誓いました。私の心にびったりなのです」（E・ステイブンスン、一九八四年、一七八頁）と書いている。

また、平川は、ハーンが早くから異民族の生活にも強い関心を寄せていたことに関しても、「シンシナーティの波止場の黒人男女やニューオーリーズズのフランス人と混血したクレオールや黒人たちを描く際、一面ではゴーチエ、ボードレル、ロティなどに共通する異国趣味的なロマンティックな見方もしているが、他面ではその言葉や迷信や風習について、ほとんど民俗学的といえるアプローチもしており、（中略）すでに二十代からそのような民俗に関心を寄せていたハーンであったからこそ、後年、日本でも片田舎へ行って、迷信や祭、諺や童歌、子供の躰けや子供の遊戯、方言、神話などにまで関心を寄せ得たのだといえるであろう」と指摘している（平川祐弘、一九八〇年、四六五頁）。

平川祐弘は、オハイオ川の波止場の黒人女性ドリーを主人公とした作品『ドリー』を分析し、アメリカ時代のハーンの特徴として、第一に日の当らぬ人々への関心、第二に異国・異人種の文化への関心、第三に芸術表現に際して民俗学的見聞を生かしたことの三つを掲げている。これらの特徴は、同時にハーンの本邦での

成功の鍵を予示したものとして重要であるとしている（平川祐弘、一九九四年、二四〇～三頁）。

このように、ハーンは、幼少期の不安定な精神や夢魔への恐怖、キリスト教への強い反発などから、中心的なものや強いものではなく、周縁的な領域の人々や文化にむしろ興味と愛着をおぼえ、そこに自己の世界を築くことで心の安らぎを獲得しようとしていたといえる。もちろん、数多くの煽情的で怪奇趣味的な、読者を挑発するセンセーショナルな記事も執筆したが、それはハーンの心の奥底にある暗黒面と下層社会の暗い世相と共鳴したものであって、不安と焦燥の反映でもあった。しかも、ハーンは、自ら逸脱者や余所者として同情と共感をもって相手の立場に立つて記述することができたのである。二〇代のハーンは、異国趣味のフランス文学と同時に、エドガー・アラン・ポーのアメリカ文学を自分の夢の世界の友としていた。やはり社会から追放されたアメリカの孤児ポーと自分を同一視することで、ハーンは自らの不安と苦悩に文学的な意味を与えることができるのではないかと考えたのである（E・ステイブンスン、一九八四年、九九～一〇〇頁）。

二・異国趣味と現地女性

一九世紀は、科学万能の合理主義の支配する時代であったが、同時に産業や科学技術の進展の結果、文明から取り残されたものへの関心や隅に追いやられ消滅しつつあるものへの興味も生み出していった。欧米では、異国趣味の作家と一般に評価されてい

るハーンが、アメリカ時代に翻訳したり紹介したりしたフランスの同時代の作家の多くも、異国のさまざまな風習や風物を絵画のように色彩豊かに美しく魅力的に描くこの思潮に属していた。一九世紀後半に異国趣味が流行した背景には、逆説的だが科学文明の開催といった形で、日常世界から遠く離れた時空間にある異国の情報や文物が、想像ではなく現実に身近なものになったことがあげられる。異国趣味の作家たちは、詩的喚起力を旅や異国にもとめたが、この時期には実際に海外の地誌や民俗、文学の研究も同時に進められた。近代国民国家がぞくぞくと成立するとともに、各国で民俗学会が創立されたのも一九世紀後半のことである（丸山学、一九五六年）。

言葉の画家や音楽家とも称され文筆の達人とされたハーンも、根が文筆の人であり、プロの作家として文芸の世界で名を上げることが目指していた。新聞記者としてルポルタージュや論説を書くことで、社会の現実や人間をこと細かく正確に観察し記録する術を身につけるとともに、二〇年余にわたるフランス文学への傾倒を通して言葉の選択や文体に磨きをかけていたハーンは、文筆家として自らを生かす最良の方法が、フィクションよりも、むしろ民俗学的な興味をもって土地の人々や風物に接し、それらを素材として翻案や再話物を手掛けることだとさまざまな経験から認識するようになっていた。ハーンがいろいろな人種が混雑するクレオール文化の中心地でもあったニューオーリンズの運河の

向こうの旧市街に自ら住んで取材し、西インド諸島に長期滞在して民俗学的な調査を実施したのも、自らの文学的な素材を求めてのことであった。ニューオーリンズでは、クレオール（この言葉は、元来はスペインやフランスの入植者の末裔を本国人と区別するために使われた用語であるが、一方で主人の言葉であるフランス語を覚えたアフリカの黒人奴隷がアフリカの母語を混ぜ合わせて作り上げた独特の言葉も意味した）の言葉、諺、歌謡、物売りの声、街頭の談話、おしゃべり、民話などを丹念にハーンはノートに記録し、料理や小咄、物腰や態度まで収集し、物売りの姿は一部スケッチに描いたりした。一八八四年一月からニューオーリンズで開催された万国産業博覧会で、ハーンははじめて日本の文物に直接触れて興味を抱き記事にもしたが、翌一八八五年四月に『ゴンボ・ゼーブークレオール俚諺小辞典』や『クレオール料理』を記念出版している。なお、ハーンが採集した三四篇のクレオール民話に関しては、平川祐弘が詳述している（平川祐弘、二〇〇四年）が、実際の作品中にも使われている。たとえば、ハーンの『ユーマ』は混血黒人女の乳母（ダー）を主人公とした小説であるが、内容はともかく口承文芸研究の観点から見ると、「昼間物語を語るとゾンビ（肉体をもった死霊）が来る」という昼昔のタブーや、語り手が「昔、昔」と語り手がいうと「それなら三倍すてきなお話、お願い」と聞き手が答えてから語り始められることなどの語りの作法のほか、語りの場や民話の変容・伝播、採話をめぐる諸問題、民話の果たす役割などにも言及していて、百

年という時代差がまったく感じられないほどその水準は高いものがある（ラフカディオ・ハーン、一九九九年）。

この時期、経済的困窮や人間関係の紛糾を忘れて、ハーンは、言葉のもつ色彩、響き、感触、無限に変化する意味を飽くことなく探求し楽しんでおり、言葉のもつ生命や海のような複雑で無限な世界に浸ることに喜びと心の慰めを見いだしていた。また十分な視力は、折り畳み式の望遠鏡と片眼鏡という遠近の利器を携帯して補い、人やその心までも一瞥的確に観察し判断した。こうして、ハーンは、五感を働かせ、日常的な身体や心の動き、さらに相手の心の中や気持ちまで感情移入し相手になりきって、同情と共感の眼差しで正確に言葉で表現することができるようになっていた。

ハーンにとつて、異文化を理解し、その心の本質を把握する上で、現地女性の存在は重要であった。すでに、シンシナティでは、黒人混血女性マティ・フォーリーと同棲し州法を犯して結婚式まで挙げており、また破綻した結婚や人間関係から逃れたニューオーリンズやマルティニーク島でもマクス夫人や女中のシシリアなどクレオール女性の存在が小さくなかった。牧野陽子は、ハーンが同じ様に異国女性との関係を通じて異国趣味を表現したボードレールやロティと根本的に異なるのは、マティや小泉節子に異国イメージを投影する対象としてではなく伝承者の役割を求めた点にあるのであり、「ハーンはいわば、女が体現する土地の心を知り、相手の視点に同化することで、異文化の方にみ

ずからの視座を据えようとした」のだとしている（牧野陽子二〇〇〇年、三四頁）。当時は常識であった西欧文化優位、キリスト教文明優位の見方をあえて排除し、百年前に西欧近代の他者認識のあり方に疑問を呈し、文化の多様性を認める態度を貫いた点で、ハーンは先駆的といえた。今日、ハーンが再評価されるのも、この点にあった。教育もなく、読み書きのできない自らのギリシャ人の母親をはじめ、有色人種の女中や乳母などの話も無視せず、そのなかにも貴重な何かがあるとみて聞きだし、そうした人々の日常の慣習や風習あるいはヴォードー教など信仰の暗闇の部分も、ハーンは「迷信」ではなく「信仰」として扱うなど深い同情と理解をもつて描き、その心意をつかむ手がかりとする類稀な資質を有していた。

三．ハーンの再話技法

一八九〇年四月に、ハーンが来日する前年に、ハーバー社へ提出した日本行き企画書には、日本の第一印象や概要に加えて、「子供の生活と遊戯」「家庭の生活と信仰」「伝説と迷信」「女性の生活」「古い歌謡」「言語慣習」「社会組織」といった民俗学的な項目が掲げられているが、読者に生き生きとした感覚を与えるようなりアリティに満ちた新しい方法で記述するには、「読者の心に日本に居るやうなはつきりした印象―観察者となるばかりでなく、さらに一般の人々の日常生活の仲間入りをして彼等の思想で考へて居るやうな印象を残す事を努めるのです」と記している

(田部隆次、一九三〇年、二二〇～二二頁)。実際、来日早々、人力車を雇って横浜周辺の神社仏閣や街並を精力的にめぐり、正確な観察や民俗学的な採集活動をはじめている。すでに、西インド諸島での長期のフィールドワークの経験やルポルタージュ記者としての幅広い視野と正確で鋭い観察を身につけていた上に、謙虚な姿勢で日本に臨んだために、ハーン作品は民俗学から文芸的な著作に至るまで正確な民俗観察に裏つけられた内容の充実した真実なものになっており、結果として深い哀歎の情がただよう感動的な作品に仕上がっている。来日の第一印象を中心に、一八九四年九月に『知られざる日本の面影』全二巻が刊行されたが、好評で年内に三版まで出された。以後毎年ほぼ一冊の割合で、教師生活等と並行して、没後の翌一九〇五年までに執念のごとく計一二冊の著書を著しているが、来日の企画書の項目はほぼ達成し、それ以上の成果をあげるに至った。

ハーンが来日した当時、日本はまだ辺境の異国として欧米人の立場からはまだ人類学的な調査対象地の位置にあった。ハーンには、来日に際しても、自からの作品の題材となる民俗採集をするという目的があり、なるべく「辺鄙なところほど好き」だったのも、そこには口承文芸が豊富に残っていると期待していたからであった(平川祐弘、一九九四年、三四〇～一頁)。

ハーンの日本文芸への関心が口承文芸にあったことは、その作品にはフィクションが少なく、また「耳無し芳一」や「雪女」など英文で発表した有名な作品はどれもマイナーな怪談奇談の類

に属し正統な国文学史には登場しないものであることにも如実に示されている(平川祐弘、一九九四年、三四一頁)。ハーンは、新しい土地に旅することで新たな作品のための素材を得ていたから、文筆家としてのハーンにとって、旅は不可欠のものであった。しかし、ハーンは最初に英語教師として赴任した「神々の国の首都」松江で、事実上小泉節子を妻として家庭をもち、多くの扶養家族をかかえるようになると、もはや一人だけで身軽に別の異国に旅する訳にはいけなくなった。一八九六年には、自らも苦い経験をもつ遺産相続や健康問題などから妻の小泉家に入籍して、日本への帰化が完了し、「小泉八雲」(ラフカディオ・ハーンは文芸上の筆名として残した)と改名する。晩年の五年間は、避暑に焼津に行く以外は、ほとんど旅行せず、もっぱらその作品の素材は文献に掲載された怪談や奇談など日本の古い物語に取材したものが中心となり、その原拠の多くも、明らかにされている(小泉八雲、一九九〇年)。日本文のよく読めなかったハーンは、妻の節子に何度も語らせた怪談を英語で芸術的に加工して作品にしていたが、この場合のハーンは「目の人」であるよりも、むしろ「耳の人」であった。節子は、ハーンの母親コンプレックスの解消だけでなく、作品を生み出す上でも、重要な触媒の役割を果たしたのである。また西成彦も、「ハーンの日本文芸は、それまでのチェンバレンらの文献学的日本研究とは一線を画し、来日以前の合衆国や西インド諸島時代、現地の非文字文化に探求を推し進めた時と同じく、目よりも耳により大きな役割を課して、

いわゆるフィールドワークの方法を日本研究に適用した点に最大の特徴がある」(西成彦、一九九三年、二頁)と指摘している。もちろん、ハーンの見覚や色彩による印象主義的な描写は、定評のあるところであるが、熱帯の極彩色に満ちた生命旺盛する風光を華麗な文体で表現していた時代とは異なり、日本滞在の晩年には日本の自然や情緒に対応する形で文体も簡素で枯淡なものに変化し、心に大きな感動をもたらす音声や聴覚に重きを置くようになっていったのである。小泉節子の「思ひ出の記」によれば、ハーンは「怪談は大層好きでありまして、『怪談の書物は私の宝です』と云つておりました。私は古本屋をそれからそれへと大分探しました。淋しさうな夜、ランプの心を下げて怪談を致しました。ヘルンは私に物を聞くにも、その時には特に声を低くして息を殺して恐ろしそうにして、私の話を聞いて居るのです。その聞いて居る風が又如何にも恐ろしくてならぬ様子ですから、自然と私の話にも力がこもるのです。その頃は私の家は化物屋敷のやうでした。私は、折々、恐ろしい夢を見てうなされ始めました。この事を話しますと『それでは当分休ませよう』と云つて、休みました。気に入つた話があると、その喜びは一方ではございませんでした。私が昔話をヘルンに致します時には、いつも始めにその話の筋を大体申します。面白いとなると、その筋を書いて置きます。それから委しく話せと申します。それから幾度となく話させます。私が本を見ながら話しますと『本を見る、いけません。ただあなたの話、あなたの言葉、あなたの考でなければ、いけません』と申

します故、自分の物にしてしまつてゐなければなりませんから、夢にまで見るやうになつて参りました。話が面白いとなると、いつも非常に真面目にあらたまるのでございます。顔の色が変わりまして眼が鋭く恐ろしくなります。その様子の変わり方が中々ひどいのです」(田部隆次、一九三〇年、三二六―八頁)とある。

西成彦は、このハーンの手法に関して、「日本に来てからの『再話』文学は、従来の『再話』形式から遠く離れ、『種本』を用いた場合にも、一旦は『口述』形式を通過させた異言語間の『再話』という奇妙な形式を採用する』に至つたとし、「かつてハーンが区別していた三つの形式―フランス文学の『翻訳』、すでに文字化された非文字文学の『再話』、非文字文学の『採話』―は、怪談の中で一つに融け合い、独自の技法として結実したものである。もはやそこに逐語訳の正確さや言語採集家の職人的な緻密さなど入りこむすきはなかつたが、『心によつて習いおぼえる』プロセスを通過した文学に転写式の機械的な仕事にはない何かが付加価値として加わるのは、当然のことだろう」(西成彦、二〇〇四年、三五―六頁)と述べている。ここで直ちに、柳田国男の『遠野物語』冒頭の、「此話はすべて遠野の人佐々木鏡石君より聞きたり。昨明治四十二年の二月頃より始めて夜分折々訪ね来たり此話をせられしを筆記せしなり。鏡石君は話上手には非ざれども誠実なる人なり。自分も亦一字一句をも加減せず感じたるまゝ、を書きたり」(柳田国男、一九一〇年、一頁)という文章が想起される。とくに、柳田が「一字一句をも加減せず感じたるまゝ、

を書いたとした点である。グリム兄弟の時代には、現代とは異なり、民衆の間に伝わる民間メルヒェンをそのまま「採話」したもののよりも、それを芸術的に加工したものがより高い評価を受けていたが、この時代にもまだこうした傾向がみられた。語られた話をそのまま翻刻しても、そこに「心で習いおぼえる」過程がなければ、ハーン作品のように人を感動させるものにはならなかったはずである。

さらに、注意すべきは、「雪女」のように、ハーンが再話した作品の中には、再び口承文芸として民間で語られるようになったものがあるという点である（大島廣志、一九九八年）。

仙北谷晃一は、「ハーンの研究は濫觴期の柳田民俗学と一脈通ずる性格を持つている」と捉え、柳田国男の民俗資料の三分類（第一部有形文化、第二部言語芸術、第三部心意現象）を紹介しながら、ハーンが「第一部から始って、第二部を通り抜け（チェンバレン、西田千太郎、雨森信成、大谷正信、妻節子らの援助が少なくなかった）、容易に第三部に到達したかに見える。『群盲象を撫づ』の逆で、殆ど独力で以て日本文化の精髓を、その心を、感得した。現実を生きている人々の姿も雅致のある英語に写されたが、今は亡き無数の人々を、有名無名に拘らず、ハーンの想像力はよみ返らせたのだった」（仙北谷晃一、一九七七年、三三五頁）と論じている。また平川祐弘は、ハーンと柳田の仕事が類似した仕事に納まるのは元来両者が英国系の民俗学の学統（フランス系の民俗学も加えられよう）に裏面で連なっているからだが、過去

を喚起する力は生得のものであり、「その生得の力を存分に生かすことを教えてくれた人物はいったい誰なのだろうか。ひよっとしてハーン著作自体が柳田の民俗学にながしかの刺激を与えてくれたのではあるまいか」（平川祐弘、一九九四年、三八七頁）と推定している。ハーンが教鞭をとっていた時期に、柳田は帝国大学政治学科に在学中で、新体詩人として異界への憧れをうたっており、彼の初期の民俗学研究は先住異民族である山人に関するものが中心となっていた。柳田は、伝説や地名などから前代日本の信仰の解明をめざすとともに、田山花袋と共に『近世奇談全集』（続帝国文庫、一九〇三年）を編集したり、「幽冥界」（談話）を『新古文林』一卷五号（一九〇五年）に発表したりしている。ハーンが、柳田民俗学の形成に一定の影響を与えたことはほぼ確実といえるだろう（岩本由輝、一九九八年）。

森亮は、ハーンの研究の再話文学の文体的特色はアメリカ時代と来日後では随分異なり、『中国靈異譚』で頂点に達したアメリカ時代のそれは「修辭癖ある華麗な文体が中心になっている。派手な比喩が目立つ。縁語を連ねた大掛りな比喩などもある。調子が高まると文中の語順転倒が屢々見られる。雅語を交えた擬古的文体も物語の内容に従って頻繁に用いられる」ものであるのに対し、晩年の『怪談』を代表とする日本時代の再話は、雅語の好みは強く残っているものの、「平易な、短い単語を活用して達意の文章」で書かれ、文章の推敲を繰り返し行つて、「真実をより明確なかつたで捉えようとする試みである」達意の方向と同時に審美的な

方向をめざしていたと述べている（森亮、一九八〇年、五六頁）。

ハーン自身も、一八九三年のチェンバレン宛の書簡で、「詩的な散文を四年間勉強した後の今、私は簡素さを勉強することを迫られています。出来るだけ装飾的であろうと試みてきた結果、自分自身の過ちによって転向させられました。一番肝要な点は簡潔な言葉で人の心を動かすことです」と記している（アール・マイナー、一九九四年、一二五頁）。

夜中の一時に、自宅で一心不乱に執筆するハーンを覗いた雨森信成は、「それはいつもの見慣れたハーンではなかった。全くの別人であった。顔がふしぎなほどに白かった。大きな目がきらきら光った。何かこの世ならぬものと通じ合っている人のように見えた」（雨森信成、一九九四年、一二五頁）と記している。

おわりに

ハーンが、東京帝国大学の招聘に応ずる条件をチェンバレンを介して出した書簡の末尾に、「妻は教師にならない迄も東京へは是非行きたいと云つたが、私は東京が嫌ひだから、数年の辛抱の後田舎で退隠して一生を送りたい。蛙の鳴く水田、晴れ上がった朝の空、霞、野火の香、田圃の歌、笠を被つた農夫、素姓が分からぬながらにそれぞれ縁起のある神社の祭礼、小さい店とそこに住んで居る人々の一生、八百屋、鮎屋、占師、僧侶、神主、漁師、不思議な話を語る巡礼。これ等は私の愛する美の世界、私の入るべき世界である」（田部隆次、一九三〇年、二六七頁）と記して

いる。妻の節子も、「ヘルンの好きな物をくりかへして、列べて申しますと、西、夕焼、夏、海、游泳、芭蕉、杉、淋しい墓地、蟲、怪談、浦島、蓬萊などございました」（田部隆次、一九三〇年、三五二頁）と述べている。ここには、ハーンの愛し憧憬した美的世界が、生命や魂の原郷をなす異郷、小さなものや消えつつあるもの、周縁的なものであったことが示されている。工藤美代子は、「ハーンが生死を越えた世界に異常なほどの関心を示し、没頭していったのはどうしても癒せない心の傷があったからだ」（工藤美代子、一九九五年、九六頁）と述べ、ハーンの生涯は心の安寧が得られる「理想の島」を求める放浪の旅であったとしている。

ハーンこと小泉八雲が失われた魂や世界を希求してさまざま永遠の漂泊者であったことは多くの人が指摘している。萩原朔太郎も、「ヘルンは、魂のイデーする桃源郷の夢を求めて、世界を當なくさまよひ歩いたボヘミアンであり、まさに浦島の子と同じく、悲しき『永遠の漂泊者』であった」（萩原朔太郎、一九七七年、三六八頁）と述べている。白大夫の総元締の家に生まれた三河出身の菅江真澄（一七五九―一八二九年）も、民俗学の先駆者の一人として始終旅をした大旅行家だが、歌を教えつつ各地を漂泊し、龐大な紀行文や随筆、地誌を残している。真澄は、どの土地でも他者性を保持しつつ、共感と同情の目で土地の人間や風物を細かく観察し、美しい文章と挿絵でそれらを丹念に記録した。小泉八雲が、数多くの名品を残したのも、癒されることのない心の傷をかかえたまま、生死をこえた世界に失われたものを求めて永遠に

さまざま漂泊者であったためであろう。

参考文献

- アール・マイナー 「ハーンと日本」平川祐弘編『世界の中のラ
フカディオ・ハーン』一九九四 河出書房新社
- 雨森信成 「人間ラフカディオ・ハーン」平川祐弘編『小泉八雲
回想と研究』所収、一九九二 講談社学術文庫
- 岩本由輝 「柳田国男とハーン」『国文学』四三巻八号、一九九八
学燈社
- 大島廣志 「雪おんな」伝承論』『国学院雑誌』九九巻一一号
一九九八
- 工藤美代子 『ラフカディオ・ハーン』一九九五 日本放送出版
協会
- 小泉節子 「思ひ出の記」田部隆次『小泉八雲』所収、一九三〇
第一書房
- 小泉八雲 『怪談・奇談』一九九〇 講談社学術文庫
- E・ステイブンスン 『評伝ラフカディオ・ハーン』一九八四
恒文社
- 仙北谷晃一 「解説」『小泉八雲作品集』第二巻 一九七七 河出
書房新社
- 田部隆次 『小泉八雲』(学生版『小泉八雲全集』別冊)一九三〇
(一九二四) 第一書房
- 西崎一郎 「新聞記者としての小泉八雲」森亮編『小泉八雲』(『現
代のエスプリ』九一号)一九七五 至文堂
- 西成彦 『ラフカディオ・ハーンの耳』一九九三 岩波書店
- 「語る女の系譜」『ラフカディオ・ハーンと女たち 耳の快楽』
二〇〇四 紀伊國屋書店
- 萩原朔太郎 「小泉八雲の家庭生活」『萩原朔太郎全集』第一一巻、
一九七七 筑摩書房
- 平川祐弘 「解説」『ラフカディオ・ハーン著作集』第一巻、
一九八〇 恒文社
- 『小泉八雲とカミガミの世界』一九八八 文芸春秋
- 『小泉八雲 回想と研究』一九九二 講談社学術文庫
- 『小泉八雲 西洋脱出の夢』一九九四(一九八一) 講談社学術
文庫
- 『ラフカディオ・ハーン 植民地化・キリスト教化・文明開化』
二〇〇四 ミネルヴァ書房
- 「異国趣味」平川祐弘監修『小泉八雲事典』二〇〇〇 恒文社
- 丸山学 『Johansenとしての小泉八雲』『日本民俗学』第三巻第
三号 一九五六
- 森亮 『小泉八雲の文学』一九八〇 恒文社
- 柳田国男 『遠野物語』一九二〇 聚精堂
- ラフカディオ・ハーン 「書簡」『ラフカディオ・ハーン著作集』
第一四巻、一九八三 恒文社
- 『カリブの女』(平川祐弘訳)一九九九 河出書房新社

(いじま・よしはる／天理大学)